

今月の「今週の倫理」のテーマは「伝統文化」です。第一週では「食文化」、第二週では「精神文化」について紹介しています。双方に共通する主題は、先人から正しく受け継ぐことと、次世代につないでいくことの大切さを教えてくれた点です。

一方で、人は自分の経験から得たことに執着するあまり、「〇〇は、こうあるべきである」「〇〇をせねばならない」というように、固執した考えに陥りやすいともいえるのではないのでしょうか。

倫理運動の創始者である丸山敏雄は、純粹倫理を提唱する際に、それ以前から日本で広く知られていた倫理道德（主に明治以降の日本の学校教育に組み込まれていた「修身」を「旧道德」と称し、その問題点を八つ指摘しました。

その一つとして「消極的」であることを挙げています。創始者は、「あれをしてはならない、これをしてはならない」という消極的な表現が非常に多かったことに触れています。先に述べた「べき・ねば」も同様の問題点と言えるでしょう。こうした旧道德の反省を踏まえ、その後には広がっていったのが純粹倫理だといえるのです。

私たちは純粹倫理の学びを正しく受け継いでいるでしょうか。倫理法人会内で、「倫理はハイかYESだよ」という言葉を耳にすることがあります。他者からの依頼を「ハイ」と素直に受け入れることは、良好な人間関係を築くうえで大切であり、こうした積み重ねは自己成長にもつながります。



## 明朗な心で取り組む姿勢が文化伝承の鍵となる

頼まれごとを「そのような依頼、自分には向いていない」と嫌々ながら受けても、良い結果にはつながらないでしょう。また、依頼する側が「倫理では、〇〇と言っていますよ」と他者に求めた瞬間に、人を変えようとする間違ったあたり方が生じます。なぜならば、両方とも旧道德の価値観で捉えているからです。

倫理運動は創始から間もなく八十周年を迎えます。どのような組織にも当てはまることですが、歴史を積み重ね、その組織に関わる人が増えるほど、原点から外れてしまう危険性があるのではないのでしょうか。

だからこそ、時には原点に立ち返ることが大切なのです。先述したように、それは旧道德が「消極的」だったという反省から始まったと言えるでしょう。

「消極的」な心を払拭するためには、「明朗」な心で取り組むことが重要です。会社にたとえると、経営者が明朗な心で仕事をする姿を見て、社員は（社長から学びたい、社長のようにになりたい）と感じ、業務に臨み成長していきます。その社長の背中を見てきた社員の中から、やがて後継者として継ぐ人材が現われるのです。

継承という点では、純粹倫理も伝統文化も同じことが言えます。現在携わっている者が「べき・ねば」の考えに偏っている場合、それを自覚することが必要です。まず、自身が明朗な心で取り組み、次の世代には明朗な心で向き合い、時には任せ、見守ることが文化伝承の鍵だと言えるでしょう。